もくじ

ちょぼくブック

02
木のまち　貯木のまち　吉野から

04　川のほとりの製材団地
06　聞き書き「私と貯木」
08　ハラオシさんに会いたい！
10　潜入！原木市
12　吉野材で家を建てること
14　銘木入門
16　こんな市も開かれます
18　吉野の割箸は木を使い切る知恵です
20　集成材が拓く「木でできること」
22　樽と樽丸ふたたび
26　製材バンザイ座談会！

34
ねじまき堂の吉野武者むちゃ修行
— mission 1.2.3 —

42
吉野と暮らす　木の道具

42　製材職人さんのものづくり
　　坪岡林業さん，丸商店さん、イヌイ木工さん
46　木の音、木の色、木の性格
　　杉本弦楽器製作所さん、
　　和田工芸さん、あかり工房 吉野さん

吉野貯木。「よしのちょぼく」と読みます。奈良の吉野といえば、桜の名所としてご存知の方も多いでしょう。その吉野山の麓を流れる吉野川沿岸に、材木がどっさり置かれた一画があります。吉野の貯木場です。材木の市場が開かれ、大小の製材所が集まっています。製材所はそれぞれの得意分野を持ち、それぞれに木のプロです。そんな木のまちの様子をちょぼっとおはなししたくて、「ちょぼくブック」を作りました。

50
木、山、川、
ひと、とき、まち、吉野

52　吉野と木のことを
　　もうちょっと話してみました
56　木のある暮らしをかんがえる
58　あとがき
60　いま、吉野貯木から

タイトルロゴ／　野口 あすか
イラスト／　乾 智美

木のまち
貯木のまち
吉野から

奈良県吉野郡吉野町は、奈良県地図のまんなかよりほんのちょっと上あたり。桜で有名な吉野山、万葉集にも登場する宮滝など、美しい景色と長い歴史を持つ山間の地です。

もうひとつ、「木のまち」という顔も持っています。となり合う村々から伐り出されたスギやヒノキが集められ、美しく製材され、日本中へ旅立ってゆくところ。通りのそこここに材木の山、煙突からもくもくと煙、フォークリフトが行きかい、製材工場の機械音が聞こえ、そしていつも木の香りがしています。

この川沿いの製材団地一帯を「吉野貯木」と呼びます。普段は働くための現場ですが、知ってほしい風景や技術、出会ってみてほしい人のいる吉野町の大切な場所です。

川のほとりの製材団地

吉野川に架かる古い鉄橋。川の向こう岸が「吉野貯木」のまちです。線路が続く先、山間に霞んで見えるのは吉野山の金峯山寺。貯木のまちは川に沿って広がっています。「吉野貯木場」は川の中州を利用して作られましたが、後に川の流れが変わって現在の地形になりました。山、そして川とともに生きてきた場所です。

木のまち「吉野貯木場」ができたのは昭和14年。それまで吉野川上流にある川上村から伐り出された吉野材は、筏を組んで水運輸送されていました。すべての売買は筏流しの終点である和歌山で行われ、経済的な主導権やうまみは吉野側にはもたらされませんでした。筏流しの風景は吉野らしさの一つとされましたが、木材業界にとってのそれは決して「のどかさ」だけの風景ではなかったようです。

そんな吉野が自立する機会が訪れます。昭和12年2月、吉野町上市にある中州地域中心に、県営吉野貯木場の工事が始まりました。完成は同14年11月。この貯木場は原木市場だけでなく3つの水中貯木場を備え、それと同時に木材団地を造成して工場誘致。これは工場で原木を建築用材等に加工し、付加価値を付けて出荷しようとする試みでした。

吉野貯木場では製材した製品を運ぶため、貨車の引き込み線も敷設しています。各製材所から貨物列車に積み込まれ、吉野神宮駅から吉野口を経由し、今度は国鉄線路を使い、製品の行きつく先は、なんと東京・汐留！ 吉野の製材が飛躍的に伸びた背景には貯木場から首都まで、ダイレクトに製品を輸送できるインフラの整備がありました。

こうした先人たちの一大プロジェクトのおかげで木材の先進地となった奈良・吉野、そして吉野貯木場。

80年近い時間を重ねた現在、やはり様変わりしています。貯木にあった大きな3つの池は埋め立てられて消え、時代の最先端だった引き込み線は廃線となりました。事業所の数は、最盛期と比べて半分以下に減少しています。

とはいえ、平成26年の吉野貯木にも、まだ多くの製材所が立ち並んでいます。スギ・ヒノキの柱や造作材だけを専門に挽（ひ）く工場、樹齢百年以上を数える吉野杉の大径木だけを挽く工場、神社仏閣や能舞台の建築材を挽く工場、掛け軸の軸棒に使われる丸棒だけを製造する工場、割箸を製造する工場、製材過程で出るおがくずを使って活性炭を作る工場等。吉野貯木は木の専門店街です。

最近になって新たに見出されつつある価値もあります。木が積み上げられた光景の面白さ、狭い空間も生き物みたいな滑らかさで動くフォークリフト（とても長い材を積んで！）、道端で木の皮むき作業をする職人さんの見事な手さばき、年季の入った木造の倉庫や古びた工場跡、廃線跡の草の小道に漂う哀愁、そして木の持つ歴史と可能性。

歩けば出合うこのまちのたくさんの魅力に、他でもない吉野貯木の人たち自身が気付いて伝え始めたことで、この『ちょぼくブック』も作られることになりました。

受け継がれるもの、なくなったもの、変わりながら残るもの。いろいろなことをよりあわせながら、吉野貯木の時間は今日も紡がれています。

（写真右）吉野貯木の工場の屋根の上にある小さな塔のようなもの。これは通称「ひっこつぼ」、おがくずの集塵機なんです。（左）原木市の様子。どんどん競り落とされていきます。

［ちょブックメモ］　昭和3年、吉野鉄道が六田駅（旧吉野駅）から延伸されたのに伴い完成した鉄橋が架かっています。正式名称は「吉野川橋梁」

聞き書き

「私と貯木」

代々の努力や工夫が積み重なって、今の吉野貯木があります。現在は機械が担っている作業も、もとは人力でこなしていたことがたくさん。そして失った風景にも、それぞれ役割がありました。まちの大先輩に「あのころの貯木」を聞いてみます。

「最初は牛車、その後は馬で」

乾 千代枝さん

「駅から貯木に引き込み線が」

西村 守夫さん

「池で泳いだり、丸太乗りしたり」

上垣 公俊さん

（写真右）馬車に丸太を積む様子。（中）貯木場を走る引き込み線。（左）材木が浮かぶ貯木池。これらは吉野貯木の原風景、吉野町在住の本迫宏典さん収集・所蔵の貴重な写真資料です。

昔は山で伐った木を筏にして、川を使って運んでましてん。その木を川から揚げて、吉野貯木の製材所さんに届けるのが、当時のうちの仕事。たまに隣町の下市町にコワ（割り箸用の木の端材）を運んで行くこともありましたなぁ。最初は牛車で配達してましたが、牛はひまがかかって。しばらくして馬を買うてなぁ。多い時は4頭。私が朝起きて一番にするのは馬の世話。餌をやって、毛並みをきれいにして、鞍を乗せて、主人を送り出して。飼い葉のまわり（準備）や、月に2回、蹄（てい）鉄（てつ）を打ちに来てもろたり。重たい荷を運んで、すり減るんやねえ。伊勢湾台風のときは、真っ先に馬を高台に移してやりました。今の吉野神宮駅のあたりまで登って、空き小屋に繋いでおいたの。おかげで馬は無事でしたが、川沿いの自宅は流されてしまいました。

吉野神宮駅から貯木場へ貨車の引き込み線が走ってましてな。製材した木を貨車に積み込んで出荷しとった。引き込み線は複線になってたところがあって、すれ違いもできたし、スイッチバックができるようにもなってましたなぁ。流通がトラック中心になって、引き込み線が廃線になるときは、レールが売りに出されて。そのときのレールは、あちこちの製材所で再利用されとるで。積んだ材木の崩れ止めの支柱に使（つか）たりとか。廃線後は線路が走ってた場所にも新しく工場が建ちましてん。オオツジさんとこの敷地に盛り上がっとるとこあってな。そこは昔、線路が走っとったところ。コンクリめくってみたら分かる（笑）せやせや、当時そのままの木の電柱が松尾木材さんとこにある。あれが最後の一本や。

川から引いた水を貯めて造った貯木池に、丸太を浮かべて保管してた時期がありましてん。第一貯木池の南端には貨車の共同ステーションがあって、第二、第三貯木池では各製材所が専用ホームを作って、ウィンチで荷物を上げてましたな。池には、最初は筏にして流してきた木を浮かべてましたんや。後に陸上輸送になってからはトラックで運んできた木をボシャーンと。今は池は全部埋め立てられてしもて、製材所が建っとるね。あの頃のものいうたら、石垣や丹治川から水を引いていた水門跡などが少し残ってるだけですわ。この貯木池で泳いだかて？。あぁ、泳いだ泳いだ。浮かんでる丸太にも乗ったよ。3本くらいつないであると簡単なんやけど、丸太の一本乗りは木がくるくる回って難しかったなぁ。

［ちょブックメモ］　吉野貯木の古い写真資料は、吉野林材振興協議会（吉野材センター敷地内）で見ることができます。

吉野貯木に「ハラオシ」という職業があります。大きな台車に乗せた原木の丸太を、電動で回転する大きなノコギリに向かって、ゆっくりとお腹で押していくのでこう呼ばれます。ひたすら力持ちが得意とする仕事のような印象ですが、むしろ頭脳派、製材所の運命を左右するとても大切な仕事です。

ハラオシさんに会いたい！

「良い柱ですね」「吉野材ですから」「あっ、やっぱり」。

木に詳しくなくとも、そう相づちを打ちたくなるほど吉野材は銘木の代表です。目の当たりにすれば良さは一目瞭然。色艶、香り、目あい（木目の具合）、どれをとっても素晴らしい。この高級材の多くの原木は吉野川上流で育ちます。長年人の手をかけ、育林技術を磨いてきた成果です。四世代に渡って手塩にかけた樹齢百年を超す木も珍しくはありません。そして当然のようにこの原木は高価です。

製材所は、原木市場で競り落としたこの高価な木を、より価値を生む製品に仕立てなければなりません。どう木取りをすれば木目がより美しく現われるか、無駄なく使えるか。これを原木の段階で見極めて判断することが求められます。えいやぁと木を適当に真ん中でパカッと割って、それから「どうしましょう？」と考えたのでは遅いわけです。

木取りを間違えれば製品価格が仕入れ値を下回ります。一大事です。製材所の利益を守るため、木に対する経験、知識、勘、すべてを動員し原木を見つめる人、その肩に一切の責任を負う人、それがハラオシさんです。

自然の恩恵である原木を数値化することは出来ません。一本一本の木に個性があります。ハラオシさんは、この木が山のどの斜面で育った木か、川上のどこの木か、だれが育てたのかなど、様々な情報を元に木の素性を感じ、見抜こうとします。

杉の大径木を専門に挽く上垣商店さんで、その仕事を拝見しました。ハラオシさんは木に触れ、上から下から眺めます。何度も何度も繰り返します。年輪と会話をしているようです。時に周りの人と相談しながら作業を進めます。原木に墨付けをすませ、木が不用意に動き出さないように固定して、いよいよ台車が動き出す—。一本の木を切り始めるまでに、相当な時間が費やされました。最上の原木から最高の材を取り出す、木と人の儀式のようです。

吉野貯木は他産地と比べ、機械化が遅れて来たとされます。機械化して、体育館のような工場に製材機を並べ、自動でたくさんの材を製材し単価を下げて市場に送り出す「効率的」なやり方。

たしかに吉野林業は、そのやり方とは、少し離れた場所にいるのかもしれません。機械化の中では後回しにされがちな木取りの大切さ。その部分を吉野では今もハラオシさんが担っています。

ハラオシさんは吉野の木がどれだけの時間と手間をかけ育てられてきたのかをよくよく知っています。だからこそ自然の恵みを余すところなく使い切って、数百年愛される材にしようと腕をふるうのです。

ハラオシさんが腕をふるえるような吉野の木が、五十年後、百年後もあるように。吉野の山で木を育て続けることが、とても大事だと思います。

［ちょブックメモ］ハラオシさんは製材の花形。「身上書に、職業：ハラオシと書けば、嫁が来る」と言われるほどで、待遇も別格だったそうです。

（写真右）木の素性を見極めながらの墨付け作業。（左）木目を見ながら、次の作業への検討が始まります。

上垣商店
吉野郡吉野町橋屋 290 − 1
0746（32）0215

潜入！原木市

山から伐り出されてきた原木が市に並び、製材業者さんたちはそれを競りで仕入れます。吉野では毎月決まった日に市が行われていますが、特に材がたくさん出るのは秋。全国の材木屋さんが集まって、１年のうちでいちばん市が盛り上がります。白熱の原木市をのぞいてみました！

材の値段は１本いくらの単価ではなく、材積あたりの金額になります。立米（りゅうべい）単価といいます。（高さ × 幅 × 長さ × 金額）です。市に参加する人は頭の中で計算がぱっとできちゃうのです！

吉野の良い材は吉野で挽きたい、という職人魂とプライドのある人たちが貯木には居るのです。立派な材を高額で競り落とした猛者にどよめきが起こりました。

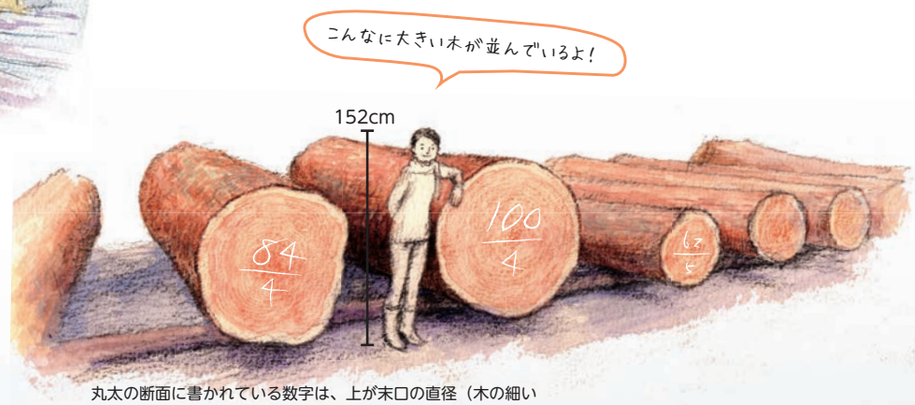
「からん からん からん」
鐘が鳴ると市の始まり。
落札すると「からん」と鐘がひと鳴り。次々に値がついて競り落とされて行きます。市に出された木たちがどんなふうに使われるのか楽しみです！

振り子

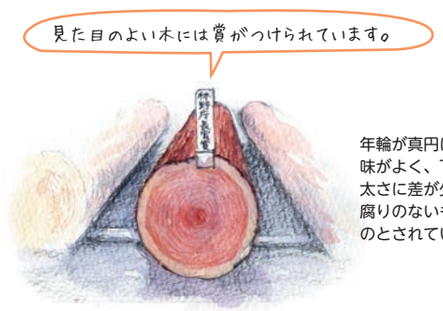
市をすすめるのは『振り子』と呼ばれる市場の職員さん。

買い方

原木を買う人です。製材所や銘木屋さんがぞくぞく買い付けに集まります。付けている番号はそれぞれの買い方番号です。

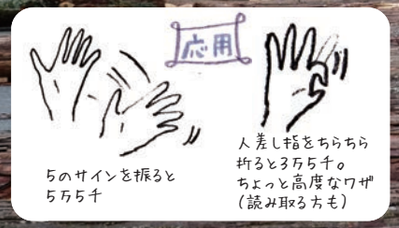


丸太の断面に書かれている数字は、上が末口の直径（木の細い方の断面）（cm）、下が長さ（m）です。
例えば、この人のもたれかかっている木は、長さが４m、直径が 100cm ということです。



年輪が真円に近く、断面の色味がよく、下から上まで幹の太さに差が少ない、虫食いや腐りのないものなどがよいものとされています。

まっすぐで立派な材が多い中、変わった木が並ぶこともあります。空洞のある木、半分に割れた大径木など。市の終わりに、その木の製材方法や使い途について皆さんが楽しげに話し合っていました。どんな木でもうまく使いこなし、木を生かしてあげることが木を使う人の腕の見せ所！何に化けるか乞うご期待。



貯木で使われる指数字